

今年行われている発掘調査の進捗状況

以前のタンネウシでも紹介しましたが、今年は5月より朱円地区の朱円26遺跡を皮切りに朱円地区でオクシベツ6遺跡、ウナベツ24遺跡の発掘調査を行ってきました。9月からは峰浜地区での調査も始まり、現在、シュマトカリベツ12遺跡およびシュマトカリベツ13遺跡を発掘しています。さらに今年中に峰浜8線遺跡も行い、合計6遺跡の発掘調査となります。いずれも、道営畑地帯総合整備事業の配水管整備に伴う緊急発掘調査です。

朱円地区の調査を進めていく中で地形形成と縄文時代の人々の生活の様子が変わってきました。調査を実施していたところは南1号から2号道路、東3線から5線道路に挟まれた地域一帯です。このあたりは古い河川が山間部の土壌や砂利を平坦部に堆積させ、その後も幾度となく河川の氾濫が続き微高地を造っていったようです。最も古い砂利層の年代は不明ですが、縄文中期(今から約4,000年前頃)には無数の河川が幾度となく流路を変えていたことが地層の中から読み取れました。人々は河川の氾濫後、一時安定した土地に移り住み住居を構築し、生活をしていました。その後の氾濫により生活の場を変えた後も、再び同じ場所に戻って生活していたようです。如何にこの場所が氾濫を繰り返す暴れ川の傍であるにもかかわらず、再び戻ってくるほど良い場所であったのか…。一つには、生業を営むのに最も適した河川や沼などの水辺の近くであり、食料資源が採集、捕獲しやすかったことのほか、海や海岸砂丘へと繋がっている場所であったことなども選択された大きな要因と推察されます。

ところで、6月号でお知らせしていた年代測定の結果が出ましたので報告します。当初はローム層と考えられる地層中の石器出土であり、「旧石器時代の遺物出土の可能性あり?」と書きました。がしかし、残念なことに朱円26遺跡から検出された炭化材の年代測定結果から縄文中期と推察される年代値(今から約4,400年前)が出されました。その後、朱円地区の発掘調査を実施していく中で同様

なローム層に似た土壌が河川氾濫堆積物中から見つっています。つまり、河川により浸食されたローム質土が再堆積され、いかにもローム層が堆積しているかのような錯覚をさせていたのです。結局、この石器を含む炭化材および土層は再堆積したものであることがわかりました。旧石器時代のものでないことは残念ですが、縄文中期に大規模な河川氾濫があり平野部の地形を大きく変えていたことがわかったことは大きな成果です。このことについては峰浜地区の地形発達史も調査した後で、まとめて報告したいと考えています。

さて、このほか朱円地区で発掘調査を実施していたオクシベツ6遺跡とウナベツ24遺跡ですが、オクシベツ6遺跡は縄文中期を主とした小規模集落が見つかっています。河川の氾濫を受けながらも幾度となく住居を構築し生活していた有様が良くわかります。

(写真2、3)



写真2 オクシベツ6遺跡土層



写真3 オクシベツ6遺跡土層



写真1 シュマトカリベツ13遺跡発掘作業風景

また、来運1遺跡で明らかとなった同時期の平地住居跡や大規模な焼土遺構などが見つかり、考古学上貴重な資料が目白押しの大変貴重な遺跡です。ウナベツ24遺跡は縄文中期から晩期に掛けての遺跡です。主体は縄文晩期で、晩期の墓坑が2基と多数の遺物が出土しています。朱円地区で晩期の遺物が出土した例は意外と少なく、海岸砂丘に近いのも要因と考えられます。

9月からは峰浜地区のシュマトカリベツ12・13遺跡の発掘調査を始めています。縄文早期から中期を主体とする遺跡です。詳しくは次回のタンネウシで紹介します。

(松田 功)

発行 斜里町立知床博物館協力会 2007.8.25

099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49

斜里町立知床博物館内

TEL:0152-23-1256 FAX:0152-23-1257

編集後記 ●9月1日から2週間、札幌学院大学の菊地拓哉さん(清里町出身)、専修大学の澤田明日香さん(小清水町出身)が、博物館へ学芸員実習に来ました。発掘作業、資料整理、植物採集、石みがき等々、ハードスケジュールをこなしました。●タンネウシの編集担当になりました、溝端ゆりかです。神戸市出身、今は朱円在住です。よろしくお願いします。